

小松住兼卷作と切つてゐる。承應四年歿。從來金澤住の清藏兼卷と小松住の清藏兼卷を別人と見たのは誤である。四代五郎右衛門兼卷は寛文の比金澤に住し、賀州金澤住兼卷寛文七年など、切る。五代五郎右衛門兼卷は享保頃の人とし、賀州住兼卷と切る。次いで木下藤右衛門の子が養はれて八太夫兼卷といひ、兼卷と切る。この頃から宮村氏を敷村氏と改めた如く、その子喜三郎の世に能樂の大鼓打となつて鍛道を廢した。

カネマキンゲツク 印牧重次 通稱少兵衛。彌六左衛門。初諱昌俊。貞享四年父少太夫の遺知三百石を襲ぎ、宇田津國政許・政作奉行。金澤御廣式御用に歴任し、寶永二年二條吉忠夫人附として五十石を加へ、享保二十年六月廿四日九十歳を以て歿した。子孫六代要人延吉(後以正)三百五十石を襲いだが、嘉永二年十二月三日自害し、その子九兵衛に安政元年十二月祖父の遺知の中百三十石を賜うて新たに家を興した。

カネマジロベエ 印牧次郎兵衛 天正十三年四月八日前田利家が鳥越城攻撃の時佐々成政に従ひて横山長知と合槍し、後來つて前田利長の臣となつた。寛永六年諸士の戦功を調査せられた時、横山長知が九月十三日自筆にて今枝民部に提出した書に、「鳥越城下にて拙子鎗の様子、佐々内藏助小姓印牧次郎兵衛と申者にて候。彼者の鎗は長柄、我等は持鎗にて候處に、印牧鎗我等臨下に當り創付候。其の迹今に有之候。彼次郎兵衛は、越中を利長様御拜領被成候以後、御家中へ被召出、母次を被成御預、御使番に被召仕候處、其の後

カネマキナホカタ 印牧直方 通稱は清八郎。碧溪と號し、草鞋に工みで運筆老成、また詩を嗜んだ。延寶六年書寫役に任ぜられ、新知百石を受け、元文二年七十九歳を以て歿した。

カネマキナホミチ 印牧直道 通稱淺次郎。實は中村正伯の二男で、清八郎直方の後を受け、元文二年祿百石を襲いだが、寶曆十八年夭折した。直道は雪潭と號し、詩才あり、又小楷を能くした。

カネマキヒロナホ 印牧弘直 通稱平摩。寛文十二年父清八郎就道の遺知百石を襲ぎ、定番御馬廻に班し、次いで金澤御廣式御用達。羽場道具渡奉行となり、天保元年五十石を加へ、十四年歿した。

カネマク 兼幕 加賀の刀工。賀州住兼幕と切る。享保以降の頃。

カネマサ 兼政 加賀の刀工。通稱山田久左衛門。甚之丞兼重の門人。加州住兼政と切り、明治二年の作がある。

カネマサ 兼政 珠洲郡中(部落名)の内の小字。

カネマツシユメ 兼松至馬 父は横山忠次の奥力吉田治右衛門。主馬、寛永二十年前田光高に小々將として召出され、新知二百石を受け、侯の内意によつて母の兼松氏を冒した。後御馬廻組・定檢地奉行となり、元祿九年九月を以て歿した。

カネマル 金丸 鹿島郡金丸保に屬する部落。永光寺藏正中二年二月十八日登山在判の文番に、「直性後家圓意沙彌尼逝去後忌日月忌如前可助。僧祈寄進田參段在同國金丸市

納帳にも金丸の凶名が見える。

カネマルシヤキ 金丸社記 一册。鹿島郡金丸村宿那彦神像石神社の縁起で、社傳の來歴、年中の神事供物、境内の舊跡等を記してある。貞元元年六月撰とあるが、その年號は疑はしい。

カネマルジヨウ 金丸城 鹿島郡金丸に在つた。もとその麓に佛性山長谷寺があつたから、佛性山堡ともいひ、また佛性寺堡にも作る。應永二年四月桃井直常の侵入した時、得田加賀介章房金丸城に至つて吉見左馬助に屬したことは、その軍忠狀に見える。天正七年温井景隆等は佛性寺に八代肥後を置いたが、八年六月長連龍が菱脇の戦に滅つた時、佛性寺の岩は關吉右衛門が火を縱つて遁走したとある。

カネマルタケクラエノギ 金丸多氣倉縁起 一册。鹿島郡金丸村多氣倉社の縁起で、承應二年仲秋石見國人森代繼の漢文で撰定せしもの。文中に當社が式内能登生國玉神社であるとの傳説が記してある。

カネマルテ 金丸出 鹿島郡金丸保に屬する部落。天和七年金丸領を新開して出來たものである。

カネマルドマリノジンジ 金丸泊の神事 能登一宮氣多神社に於いて、往時毎年二月中未日の夕景に行うた神事。この時鹿島郡金丸の宮では待請の神事があり、翌中日一宮の神輿と金丸に幸して助座加持の神事といふを行ひ、翌日還御する例であつた。天正十二年からその事止んだといふ。

町三段登、承久元年檢立出定」とある。後世亦金丸保がある。

カネマルホ 金丸保 鹿島郡に屬し、藩政時代では、金丸・金丸出・鹿島路・能登部下の四ヶ村を含んで居た。

カネミツ 兼光 加賀の刀工。兼光と切る。慶長頃。

カネモト 兼元 加賀の刀工。通稱彌兵衛。天正の頃越前大野から來住したといふ。

カネモリ 金森 鳳至郡鴨川の内の小字。

カネユキ 兼幸 加賀の刀工。甚之丞兼久の弟といはれる。

カネヨシ 兼義 加賀の刀工。加州金澤住藤原包義と切る。享保頃。

カネワカ 兼若 加賀の刀工。辻村氏。從來の説に據れば、初祖を四方助兼若とし、天正の頃美濃の關から移殖したとするが、その形跡は甚だ薄弱であるから探らぬ。今記録及び作品等から見るに、加賀に入國した兼若の初代は甚六で、慶長十四年の作が最も古く、元和五年八月越中守高平と改銘し、寛永四年の頃歿。二代は高平の長子で、四郎右衛門兼若といひ、寛永五年から景平と銘じ、承應三年八月の作を最終とする。歿年不詳。三代は高平の三男で、兄景平の後を襲いだ又助兼若とし、寛永六年の初銘を見るが、爾後の作品を缺き、明暦以降に至つて頗る多く、延寶五年正月六十五歳で歿。四代は又助兼若の長子で、幼名四方助、後に四郎右衛門兼若とし、元祿頃までの作品多く、正徳元年五月歿。五代は四郎右衛門兼若の長子で甚太夫兼若といひ、元文の頃に至り、六代は甚太夫兼若の長